



2020年(令和2年)
7月号(No. 902)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

令和2年度通常総会を開催 コロナ禍で異例の入場制限・ネット配信 今年度の事業達成の見通しつかず

令和2年度通常総会が6月20日、四谷の主婦会館で開催されたが、新型コロナウイルス感染症防止のため出席人数を制限し、総会の様子を全国に動画配信した。「令和元年度事業報告」「令和元年度決算報告」「定款施行細則の変更」を審議、いずれも原案どおり可決、承認された。また、会員減少と寄附金の大幅減少が報告された。

今年の通常総会は異例の、少人数・ネット配信での開催となった。新型コロナウイルス感染症防止のため、会場の出席人数を限定し、会場の様子をネットで配信するという方法をとったためだ。出席者は全員マスクを着け、座席を大きく離して窓やドアは開け放すという、いつもとは様相が異なる雰囲気の中で開始された。

また、ネットのユーチューブを利用した動画の配信を同時に行なった。全国の会員にとっては、来場せずに参加できるため、多くの会員が閲覧してくれることを期待したが、結局30名ほどの閲覧にとどまったようだった。さらに機材の不具合で、冒頭30分間にわたって音声が出ないという事故が起ってしまった、大変申し訳ございま

目次

令和2年度通常総会を開催 コロナ禍で異例の入場制限・ネット配信 今年度の事業達成の見通しつかず ……	1
第74回ウェストン祭はささやかに開催 ……	5
グレート・ヒマラヤ・トラバース(下) 未踏峰パプクンは時間切れで断念 ……	6
アルバータ峰の絹のザイル ——学習院山岳部百年周年記念会から ……	10
苦境に立つ山小屋に支援の輪を ——登山者からも「山小屋エド基金」 などに資金援助 ……	12
東西南北 ……	13
図書紹介 ……	15
新入会員 ……	16
会務報告 ……	17
ルーム日誌 ……	18
会員異動 ……	18
INFORMATION ……	18
編集後記 ……	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

■古野淳会長の挨拶概要

冒頭、古野淳会長より次のような挨拶があった。

「コロナ禍の中、登山を自粛せざる得なくなったご不便や、行事の中止・延期など、これまでご準備されてきた努力や苦勞が報われない日々が続き、苦澁の判断を余儀なくされた方も多くいらっしゃる

ことと拝察いたします。政府の自粛要請に伴い、各業界・団体ごとにガイドラインの提示が要請され、当会を含む山岳4団体でも要請に従っております。これらの内容について、皆様にご理解をいただき、感染防止にご協力いただいていることに深く感謝申し上げます。

今後も発表されるガイドラインを参考に、新しい生活様式、登山

様式の下での登山を楽しんでいたければ、と願っております。多くの制約はありますが、登山は本来、自由です。自らの頭で考えて行動していただきたいと思っています。新たな発想で登山を考え、多様な価値観を取り入れ、次の時代の登山文化を創造していただきたいと希望します。

なお、懸案だった名簿作成は、個人情報保護法規定などの改定が終了し、実行段階になっております。また、役員の任期や定年延長、ご寄附のご協力の呼び掛け、私立図書館設立の検討なども積極的に行なう考えです。」

《審議事項》

■令和元年度事業報告・決算報告
(第1号、第2号議案)



ユーチューブを利用して、全国に動画を同時配信した通常総会の模様

本年度の総会出席者は25名。委任状提出者は592名、議決権行使書提出者は2411名で、出席

化などによる会員数減の傾向が強まり、準会員の増加はあるものの、全体としては減少した。現在の会

者と合わせて3028名となり、現在の会員数の4564名の過半数を上回っているため、総会是有効に成立することが確認されたのち、議案審議を開始した。令和元年度事業報告は永田弘太郎・総務担当常務理事より、同決算報告は古川研吾・財務担当常務理事より、それぞれ説明があった。

【事業報告】これまで準会員制度や会員特典サービスなどを行なって、会員数の減少にはいつ

たん歯止めが掛かったが、高齢

員数は4618名で、131名の正会員と89名の準会員入会があったが、正会員は152名の減少だった。

平成30年度に立ち上げた記念事業実行委員会は、令和7年の当会創立120周年を目標に、令和元年度に事業内容を確定し、一部は実施している。登山振興事業としては、安全登山の普及の一環として、登山講習会や雪山天気予報配信、冬山登山指導事業の積極的な展開など諸施策を進めた。

また、一般登山者を対象とする講習会や登山教室は参加者も多く、YOUTH CLUBをはじめ、20以上の支部で行なわれている。マスコミや公共団体などが主催する文化事業支援としての登山教室などの講師派遣も多いが、支部での独自運営も増えている。

さらに、障がい者支援登山(視覚障がい者、知的発達障がい児、自閉症者)なども継続して行なわれた。

山岳研究調査事業としては、上高地山岳研究所を利用している研究や福島第1原子力発電所事故の影響調査、国土地理院が整備する地図の登山道修正に協力している。山岳環境保全事業としては、

「高尾の森づくり」や三宅島での活動を継続しているほか、全国10支部でも森づくり活動が盛んに行なわれている。

【決算概況】令和元年度は、従来から継続している会員増強策と経費節減活動をより強力に推し進めたものの、前年度を下回る実績しか残せなかった。収益は全体で8567万4000円となり、対前年度比で214万2000円、2.4%の減少となった。会費・入金には会員数の減少傾向が続いている。寄附金は、指定正味財産増減の部に計上されているものを合わせても大幅な減少となった。

費用は総額で9173万6000円となり、対前年度比514万5000円、5.9%の増加となっている。事業別の内訳では、支部事業費が支部での記念事業の開催が増加し、2262万9000円となった。山岳研究所等事業費が744万円と増加した。

この結果、(I)一般正味財産増減の部については、対前年度比728万8000円、594.2%の減少で、△606万1000円(当期損失)となった。当年度は(Ⅱ)指定正味財産増減の部に、寄附者によ

り使途が指定されている寄附金（創立120周年記念事業関連など）438万6000円を計上している。その他の損益を含め当期指定正味財産増減額は322万6000円（当期利益）となった。これらを合わせた正味財産増減額は△283万5000円（純赤字額）となった。

案

定款施行細則第3条の2項および3項の改訂。

2項の改訂…新入会員の初年度の月割り料金の算出基準日が、実際に会員となる日より1ヶ月近く早いいため、月割りの換算月を1ヶ月分減らす。

3項の改訂…定款第8条では「入会の承認は会長が行うもの」としているにもかかわらず、定款施行細則第3条3項では「理事会によつて入会が承認」となっており、矛盾するため。

《報告事項》

■令和2年度事業計画・予算案

コロナウィルス感染対応によって、多くの計画が中止もしくは変更となり、いまだに本年度事業について計画が立てられない状況が続いている。「令和2年度の事業計画・予算」は、1月に支部や委員会から提出いただいたもので作成し、内閣府に提出したものであるため、現実に実行できるものは限られる。改めて支部や委員会に事業計画・予算の提出を依頼することも考えたが、実行できる計画を立てること自体がこの状況では困

難であることから断念した。

【事業計画概要】十数年前から顕著となってきた会員の高齢化、会員数の減少などの問題解決のため

YOUTH CLUBなど、事業活動の活性化策や準会員制度の導入などの施策を実施しているが、会員減少に歯止めが掛かるまでには至っていない。法人運営の根幹となる会費収入の増加には結び付いておらず、新入会員の獲得が、今年度も喫緊の課題となっている。一方、本会が公益法人化したことに伴い、国内では数少ない紺綬褒章の授与申請団体となったことで、一層寄附金を受ける環境が整うこととなった。これらを活用しての組織的かつ大規模な寄附金募集が必須となっている。

【予算概況】令和2年度の予算については、会費収入は前年を維持する。寄附金については、創立120周年記念事業などを控えて、

寄附金募集に会を挙げて注力する。経常収益は1億1153万7000円となる。一方、費用は委員会事業費を前年度予算額以下になるよう切り詰めている。これに加えて創立120周年記念事業の本部負担額を見込み、経常費用は1億

1074万9000円を見込んでいる。結果、当期経常増減額は78万8000円と、若干の黒字となる見込みである。

なお、予算については、新型コロナウイルス感染防止対策で本会の活動が制限されているのが現状で、先の予測が困難であり、再編成は行っていない。

■その他の報告事項

*創立120周年記念事業 ① グレート・ヒマラヤ・トラバース…第1回として東ネパール登山隊2020が実行され、パプクカン登頂は多雪のため断念した。また、都市封鎖により1ヶ月にわたりカトマンズに滞在した（出発2月29日、



議長席で議事を進行する古野会長(左から2人目)ら



総会会場内でも理事会メンバーを中心に出席人数を限定

中止もしくは延期となった。同登山隊は、マナスル山群の未踏峰を目指し3月に実行されたが、登頂できず、また、カトマンズの外出禁止令で足止めされた。

＊雪山天気予報はGW期間中の配信を中止。

＊9月26・27日に行なう支部合同会議は、規模を縮小する予定。

＊新入会員オリエンテーションはZOOMで開催予定。

■質疑応答(要点のみ記載)

＊事前にいただいた質問。

〔質問1-①〕総会資料をペーパーレス化して、個別郵送を廃止してはどうか。

〔回答〕紙での送付は法律で定められており、本会の定款15条でもそのように定めている。しかし、定款を変更することで可能でもある。現状ではコストが掛かるが、システムを構築し、定款変更でデジタル化を進めたい。

〔質問1-②〕プラスチックの会員の証の有効期間を延長できないか。

〔回答〕検討したい。

〔質問2-①〕準会員は入会後の3年以内の、任意のときに通常会員へ移行の手続きができるのか？

〔回答〕可能だが、会費を年度末分まで徴収しているため、放棄する必要がある。また、当会の会計基準が4月1日であるため、財務上もコンピュータのシステム上も大幅な変更が必要となる。

〔質問2-②〕準会員が支部の役員になっても支障はないか。また、支部での関わりの方は？

〔回答〕支部の役員になっても支障はない。3月31日時点での準会員は264名。準会員が多い支部は東京多摩支部67名、広島支部18名で、無所属と首都圏95名。ほとんどがYOUTH CLUBで活動していると思われる。本部の委員会でも活躍している。

〔質問3〕今年度の事業計画は、新型コロナウイルス感染防止のため変更や中止が多くあるが、なぜ反映されないのか？

〔回答〕法律上、3月末に内閣府に提出したものを掲載するため。

〔質問4〕役員の定年制を理事会で決定することはおかしい。

〔回答〕役員の定年制は定款施行細則にあり、総会での審議事項。定年制および年齢制限については議論をしている。

〔質問5-①〕YOUTH CLUB

UB事業の評価指標は？

〔回答〕3年間の入会会員数70名、退会者13名。入会準会員数51名、退会者5名。

〔質問5-②〕同事業で令和元年度予算250万円に対し、支出130万円と大きく異なる理由は？

〔回答〕3国学生交流登山関係が不要になり、また、雪崩ピーコン(10台)の更新予定が、記録的な少雪で更新せず。

〔質問5-③〕同事業で支出の具体的な用途は？

〔回答〕2019年度の予算執行状況は、業務委託費約51万円、講習会費約48万円、講習会保険料約10万円、学生部関連費用約12万円、物品購入費約9万円(収入は含まれず)。

＊会場からの質問。

高橋聡会員(5832)・・・理事が退任したが、補充はするのか。

古野会長・・・現状の理事で問題はないので、補充する予定はない。

高橋聡会員・・・寄附金が減少しているというが、永年会員に寄附をお願いしたらどうか。

古野会長・・・評議員会で永年会員にお願いする予定。

(報告) 古川研吉、永田弘太郎

REPORT

第74回ウエストン祭はささやかに開催

信濃支部 青木保良

本年も6月第1日曜日の7日、上高地・ウエストン広場で第74回ウエストン祭が開催された。

今年も思いも寄らない新型コロナウイルス感染拡大に伴い、全国的な移動制限により上高地への入山もままならず、交通機関、旅館・ホテルの営業自粛などにより上高地を訪れる人は極端に少なく、会場周辺を訪れる人もまばらな中、



信濃支部員たちだけで、ささやかに開催された今年のウエストン祭

天気には恵まれて、ささやかながら支部員11人で実施した。

ウエストン師のレリーフが復旧された1947(昭和22)年に始まったウエストン祭は、以来今回まで一度も欠かさず開催され、今年で74回を数える。この間、信濃支部にあつてはその実施が困難な時期もあり、支部長挨拶にもあつたとおり、ウエストン祭中止の議論もあつたと聞いているが、支部長はじめ支部員が過去の経緯を踏まえて話し合い、規模を縮小してでも実施するとの結論となつた。

ただ残念ながら、例年ならば前日に行なわれる徳本峠越えの記念山行や、祭典本部における打合せ会は実施できなかった。

当日はいつものように横断幕を張り、10時から角田啓蔵支部員の司会により始まる。

最初に米倉逸生支部長から挨拶があつた。冒頭、最近、上高地地域で発生している群発

地震に触れ、懸念を表明した。

ウエストン祭は昭和22年のレリーフ復旧式から数えて73回を重ね、今年は74回となる。この間、1回も欠かさず実施してきたことは、我々にとつて大変なプレッシャーでもある。信濃支部では、1973(昭和48)年5月にアンナプルナI峰での遭難事故があり、犠牲者も出してしまったことから祭典中止の意見がある中で、結果的に実施されたことがあつた。そのことに触れ、ウエストン師を偲び、先人の遺徳に感謝する意味でも、今回も実施できたことは大変意義深い、との挨拶があつた。

続いて植松晃岳、松本潔支部員2人によるウエストン師レリーフへの献花。例年は松本市立安曇小学校の児童により行なわれていたものである。短時間の祭典の中、一番盛り上がった場面である。

その後、山で亡くなられた方々に対し、また、登山のさらなる安全を祈つて黙祷を捧げる。次に、日本山岳会古野淳会長からのメッセージを、東英樹副支部長が披露した。コロナウイルスの感染拡大による困難な状況の中、ウエストン祭が開催できたこと、また、多くの

先人が今日、安全な登山が楽しめるよう努力されたことへの敬意が示され、日本人が独自に発展させてきた登山文化の精神を忘れることなく、次の世代に伝えていくことが会員の総意である、との言葉をいただいた。

続いて上高地町会長で、支部員でもある上條敏昭様から、感染症で考えてもいなかった自粛ムードの中、今回、ウエストン祭が開催できたことは大変意義深い。夏以降、通常どおり登山者で賑わい、多くの皆様が上高地を訪れることを祈念したい、との挨拶を頂戴した。

この後、通常なら第2部として行なわれるはずの記念講演は、ヒマラヤなどで活躍されている平出和也氏にお願いしていた。多忙の中、せっかく都合を付けていただいたのに実施できず、大変残念だった。来年は、ぜひ多くの皆さんとともにお話を聞きたいと願うばかりである。

最後に、「来年もこの場所、新緑の上高地で会いましょう」との司会者の締めくくりに言葉で、今年のウエストン祭が終了した。

(信濃支部ウエストン祭実行委員長)

REPORT

グレート・ヒマラヤ・トラバース(下)
未踏峰。パブukanは時間切れで断念

松田宏也

3月26日ナンゴ・キャンプ〜27日ストーン・ハット〜28日ヤンマ・コーラ上

昨日はラム(僧侶)を呼びブジャ(安全祈願)を受け、栄養補給のためにヤギ1頭を買い、皆で平らげた。今日からは最奥の村ヤンマを経て未踏峰のパブukanを目指す。

新たな気持ちでナンゴ・ラの道に入った。記念碑を過ぎ、急登を登り切ると眺望の良いカールにあるナンゴ・キャンプに出た。最近建てられたらしい小屋もある。水も引かれており、快適なキャンプサイトでのテント泊となった。

ナンゴ・ラまでは約600mの登りだ。峠の手前からは雪が出てきた。スムーズな荷上げのためにグンサで雇った5頭のヤクは峠の雪に動けず、荷を置いて引き返してしまった。峠からはトレースがあるものの膝から腰までの雪に足を取られ、ペースは上がらない。右足に傷を作ってしまった、遅いペースはさらにダウンする。やがて

ガスの向こうに大岩が見え、その裏手にキッチン・テントが現われた。ようやくストーン・ハットに到着した。峠に置かれた荷は、ポーターが往復してキャンプへ降ろした。ポーターの強靱な体力には驚くばかりだ。

翌日、好天の朝、深雪で分りにくい道をヤンマ・コーラへ下る。ヤクに遭遇しながら森を抜けると・ランジョン・カルカの小屋だ。シヤクナゲの林を巻くように下り、橋を渡るとヤンマ・コーラに出る。今日のテント場までは後1時間ほどだ。足の痛みに耐えながら川沿いから山道を登ると、沢の音が聞こえてきた。シヤクナゲがまだ蕾のテント場では、早くもポーターが焚き火を囲んでいた。

29日ヤンマ〜30日(同地休養)、31日〜4月2日パブクタルBC
ヤンマの手前のヌプでテント泊の予定だったが、ヌプに着いてみるとポーターの姿もテントも見当



GHT期間中、お気に入りとなったトンパを飲む3人

たらない。どうやらヌプに早く着き過ぎたので、ヤンマまで行ってしまったようだ。ヤンマまでは私の足で後3時間は掛かるだろうが、腹を決めて歩くしかない。トボトボと山腹を巻いていくと、ヤクが群れる平原に大チョルテン、そして、正面の丘にゴンパの赤い屋根が見えてきた。やつとの思いで最奥の村ヤンマにたどり着き、熱いミルクティにありついた。今日もよく頑張った。

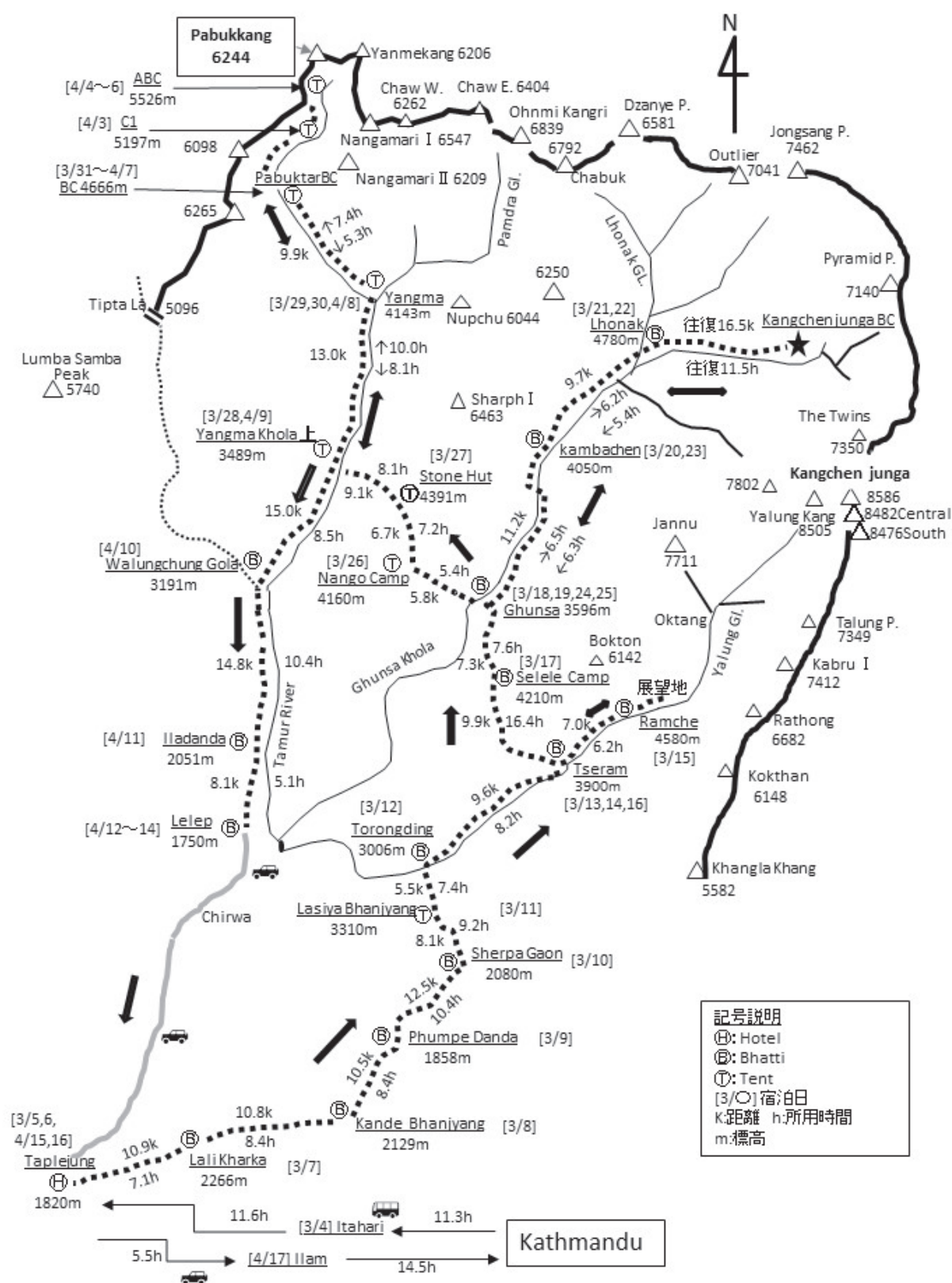
翌日は村長宅を表敬訪問。GHTの目的の一つである、集落の環境変化調査のためのインタビューを行なった。雪が降れば陸の孤島と化すヤンマの集落は、10戸(40



最奥の村ヤンマ。斜面にゴンパと家屋が見える

名ほどである。ヤクを育て、乳を搾りチーズを作る。干し肉、毛皮、仔ヤクで交易をし、食料や生活物資を手に入れる。猫の額ほどの畑で穫れるのは、小さなジャガイモくらいだ。苛酷過ぎる自然環境の中で土地を去ることもせず、先祖代々の文化を継いできたヤンマの村人。85頭のヤクのお陰で、村長の孫はカトマンズの学校に就学していると言う。生命力の強靱さと生活力のたくましさが見え隠れと伝わってきた。

31日、ヤンマから湖(チェチェ・ポカリ)の左岸を行き、先発隊が設営しているベースキャンプを目指す。平坦地から大岩方向に登って



行くと、カラフルなテントが現われた。水場が近く、風も防げる絶好のキャンプサイトだ。

翌日、早朝から賑やかな声が聞こえる。ポーターたちが石を積み上げ、タルチョ（祈禱旗）を張り、安全祈願の祭壇を作っている。祭壇には、拾ってきたブルーシープの立派な角が飾つてある。護摩の煙が青空に広がる。お神酒をいただき、掛け声とともに米を宙に高く撒き、BC開きの儀式を終えた。

2日はアタック隊の荷作りを行った。アタック隊は重廣さん、吉井さん、シエルパのラムカジの3名である。私はBCキープだ。上部は雪が多くてラッセルを強いられ、また、ザイルを使う箇所も多いはずだ。私の実力では到底無理だろう。未踏峰に挑戦できなくても後悔はない。それよりも後残りわずかで完遂できるGHTに全力を挙げるの方が、私にとって大きな挑戦であり、最大の目標であった。

アタック隊の行動概要は以下のとおりである。

3日C1→4日ABC→5日ABCから5798m地点往復→6日

ABCから5920m地点往復→7日BC

「雪でガン・ラに向かうルートが判明せず、軌道修正する。ナンガマリ西面を右手に見ながら北上し、5197mにC1を建設。4日、相変らずルートは分かりにくい、5526mにABCを建設。

5日、ABC左手の岩壁帯の中にあるはずのガン・ラへのヤク道が発見できず、岩壁帯の裾をトラバースし、ミックス壁を登り上部プラトヘ。さらに雪原を東に進み、頂上に向かうルートを確認しABCに戻る。本日の到達点は5798m。

6日、暗いうちにABCを出発。ラッセルが深く進まない。昨日の到達点から雪原を北西に進み、雪稜にフィックス・ロープを2P（100m）使用するが、さらに上部は、岩壁帯と懸垂氷河が行く手を遮っている。頂上までの距離はまだ900m近くあり、時間的にも無理と判断し下山にかかる。最高到達点は5920mであった。7日、BCへ下る。」

一方の私は、BCでひたすらじつと待つのみである。ここ数日、午前中は晴れていても、午後からは

降雪の日が続いている。

アタック隊は大丈夫だろうかと気に掛かってきた日の朝のことである。コックのパンカが私のテントの前で「ユキヒョウのアシアート！」と騒いでいる。確かにユキヒョウがいてもおかしくない地域だ。滅多に現われぬユキヒョウが私のテントまで来たということは、GHTはもうろん、パブカン登頂もうまくいくことの前兆かも？ と思えてくる。何かにつけて人は縁起を担ぎたくなるものだ。

しかしながら翌朝、テントの前で黒々したものが私を見詰めている。ユキヒョウか？ と思ったが、どうも怪しい。「イヌだ！」ヤンマにいた牧羊犬のチベット犬だ。なんと昨日のユキヒョウの足跡は、目の前のチベット犬に違いない。がつくりがつくり、パンカと大笑いした。

8日ヤンマ→9日ヤンマ・コーラ上→10日オランチュン・ゴーラ→



C1から見たパブカンの全景。中央がパブカンの頂上

11日イラダンダ

8日間お世話になったBCに別れを告げ、ヤンマへと下る。夕方からは雷とともに雪が降り始め、テントの周りを除雪するほどの大雪となった。翌日、ヤンマ・コーラ沿いの道を下る。小雪舞う中シヤクナゲ林のテント場に着くと、往路はまだ蕾だったのが、ちらほら真つ赤な花を付け始めていた。

10日もヤンマ・コーラ沿いに下る。谷沿いから山道の急登、崖に付けられた階段の上り下りを経て、



パブクカン挑戦のためのベースキャンプ

タモールナディの谷沿いに入ると荒れた道路に飛び出た。崖崩れで寸断された道路を2kmほど歩くと、大きなゴンパが立つオランチュン・ゴラ村に着いた。村にはすでに中国側から自動車道が通じ、中国製生活用品が入ってきていた。11日、メガワ付近で泊まる予定だったが、テントスペースが狭いため、イラダンダまで行くことになった。午後からは雷が鳴り、雨が降り始める。道はアップダウンが激しく、ヘトヘトになって宿にたどり着いたときには、薄暗くなっていた。いよいよ明日は車が入るレレップだ。レレップまで行けば、後は車でタプレジュン。歩く



最高到達点からパブクカンの頂上を仰ぐ

のも明日までだ。
12〜14日レレップ〜15〜16日タプレジュン〜17日イラム〜18日カトマンズ
レレップまでは穏やかな道だ。標高が下がるにつれ、春めいた陽気が漂ってくる。畑には大麦が揺れ、のどかな農村の風景が目に見える。昼過ぎにレレップ到着。もう歩かなくていいんだ、と思うと嬉しい。車の手配で3日待つことになったが、ここまでたどり着いた苦勞を思えば大したことない。13日、夕飯を食べていたら、「ハッピー・ニューイヤー」と乾杯が始まった。今日はネパールのビク

ラム暦でのお正月らしい。ポーターの踊りに我々も交じって、久しぶりの楽しい宴会となった。15日、ジープでタプレジュンに向かうが、乱暴に削ったばかりの悪路に、車は引つ繰り返らんばかりに大きく揺れる。整備された道路に出るまでは、生きた心地がしなかった。タプレジュンは、コロナウイルスによる非常事態宣言で多くのホテルが閉鎖中であつたが、かろうじて営業していたリゾート・ホテルに転がり込むことができた。予想に反して料金は激安、料理もおいしく、シャワーもお湯が出る。ああ、ようやくGHTが終わったんだとひと息ついたが、まさかこの先、前代未聞のロックダウンで帰国できない事態に陥るとは、いったい誰が知ろうか、である。

2日後、カトマンズへの通行許可書を役所で得てすぐに出発。イラムで仮眠後、先を急ぐが、なんとまあ、あきれたことにカトマンズまでに計63ヶ所の検問があつた。カトマンズに入るといつも大渋滞の道路はガラガラ、人も歩いていない。ホテルも閉鎖、店もクローズ、国際線もストップ、厳格な外出禁止令で街は取り締まりの警官

だらけ。異様な光景に状況が飲み込めないまま今回、GHTの手配をしていたいただいたコスモトレック社に到着した。

ありがたいことに、同社の大津社長のご厚意に助けられ、社屋に宿泊まりができるようになったが、国際線フライトの再開はロックダウンのたびたびの延長で目処がつかず、体操、洗濯、読書、スマホでの連絡、これの繰り返しの日を過ごすはめになった。

カトマンズに入つて27日目、待ちに待った帰国便が5月15日、成田直行のチャーター便としてフライトとなった。長い長いGHTの山旅の後に、これまた長い我慢の軟禁生活。世の中何が起るかわからんもんだわい！ 日本を発つて2ヶ月半、ようやく私のGHTの山旅修行が、軟禁生活のおまけ付きで無事終了となった。

末筆ながら、ヘルプをいただいた多くの方々に心より感謝を申し上げるとともに、今後の各ステーションの壮大な山旅への参加と、ご支援を切にお願いし、グレート・ヒマラヤ・トラバースのファースト・ステーションの概要報告とさせていただきます。

(千葉支部長)

ANNIVERSARY

アルバータ峰の絹のザイル

— 学習院山岳部百周年記念会から

藤大路美興

百周年記念会には、日本山岳会から古野会長はじめ多数の方々にご参加いただき、併せてお祝いも頂戴し、誠にありがとうございました。遅くなりましたがお礼申し上げます。また、開催に当たり富山県立山博物館、松本市立博物館、白馬・山とスキーの総合資料館、公益財団法人永青文庫のご協力を得て、意図する目的を達成でき、感謝申し上げます。

学習院輔仁会山岳部は、1919(大正8)年に旧制高等科の旅行部として発足し、去る2019年11月30日に創立百周年の記念会を、学習院創立百周年記念会館で行ないました。

山岳部の卒業生の会である山櫻会は、1949(昭和24)年の新制学習院になっても、高等科と新設された大学の山岳部の卒業生の会として活動をしています。旧制高等科山岳部の卒業生である松方三郎や板倉勝宣、加藤泰安などは旧制の京都大学・北海道大学などに

進学し、それぞれの山岳部で活躍しました。

100年を迎えた学習院輔仁会山岳部の実情ですが、高等科は教員の指導の下、部員も多く元気です。一方、大学はこの十数年、片手がやつとの陣容ですが、OBの支援でじみちに活動を続けています。

山登りの故郷に関する講演2題

そんな実情を嘆いても100年を迎えたことは事実なので、記念会を催すに当たり山岳部と山の故郷とのつながりを軸に、講演会を行ないました。

古くは、山に登るに当たりその山に精通する案内人を頼りにしていましたが、その在り方も時代とともに薄れてきました。しかしながら、100年を振り返るなかで、必ず山の故郷とのつながりを意識させられることになります。

その数ある対象地の中で、立山芦峯寺と白馬村に焦点を当て、それぞれの地域に関連する2講演を

行ないました。

一に、「松尾峠の遭難・遭難の碑と芦峯寺」と題して、1923(大正12)年1月の板倉勝宣の遭難にまつわる、芦峯寺の案内人とその後に芦峯寺に立つた遭難を記した「遭難の碑」について、山櫻会会員の檜垣陽三が講演しました。草創期の山岳部には松方三郎・田中薫・岡部長量・波多野正信・加藤泰安など多くの先駆者がおりますが、中でも板倉勝宣は、スキーを用いた先進的なスタイルで積雪期の槍ヶ岳の登頂を果たし、北大進学後もスキー部に籍を置き、大雪山などの冬山を次々に開拓しました。松尾峠の遭難は、立山登頂を目指してのことでした。

『学習院登山史I』を編集した先輩方は、芦峯寺の皆様とのコミュニケーションの大切さに思いをいたし、2007年7月を第1回の「板倉祭」とし、毎年、芦峯寺の皆様と交流を続けております。

二に、北アルプス・八方尾根の「第3ケルン・映画『スキーの寵児』誕生」と題して、山櫻会・雪櫻会(スキー部OB・OG会)の福岡孝純が講演しました。

昭和初期、八方尾根は燕温泉の

笹川速雄からスキーの手ほどきを受けた、登山ガイドの大谷定雄らによって山スキー場として開発されました。そこへ学習院山岳部のスキー一般合宿に、笹川速雄のアドバイスを受けた福岡孝行が参加しました。同時期の八方には、京都大学の高橋健治らもいました。

八方尾根に数あるケルンの一つに、第3ケルンがありますが、このケルンはいわゆる遭難碑ではなく、寺田健一・松枝夫妻が結婚25年を記念し、1937(昭和12)年10月に、スキーヤーの遭難予防のために設置したものです。

「白馬・山とスキーの総合資料館」には、福岡孝行の事跡が展示されていますが、八方尾根は肥田正次郎を総指揮に、福岡孝行の技術指導で学習院や地元ガイドのバックアップで劇場映画『スキーの寵児』を制作、その舞台となりました。戦争中に家族で疎開していた福岡孝行・寺田健一らの協力で、八方尾根のスキー場としての開発が進みますが、ゴンドラの設置には福岡孝行と同年代で、山岳部のOBでもある東急の五島昇も協力しています。

記念会当日のゲストとして、芦



経年変化で白絹の光沢が失われているザイル

峠寺から立山ガイド協会会長の佐伯高男さん、白馬村から望翠荘の大谷定雄さんのお孫さんである太谷陽一さんに遠路をお出掛けいただき、会場でご紹介をさせていただきました。

当日の参加者には、尾瀬・長蔵小屋の平野紀子さん、上高地・徳澤園の上條敏昭さんにもお越しいただき、山登りの故郷とのつながりを改めて強く思った次第です。

登山の方法や関連する情報収集の手段、衣類・道具類の進化とともに、食糧の軽量化と利便性の向上、高所における医療や高度の克服方法などは、この100年間に大きく進歩しました。後輩諸君に

は、こうした登山活動環境の変化にあっても、世代を超えて山の故郷とのつながりを大切にし、続けてもらいたいと願うものです。

展示品のお宝2点

また、この会では山岳部に関わるパネル・道具類の展示も行ないました。当日の展示品のお宝を2点、写真とともにご紹介します。

1点は、第1次マナスル遠征隊で使用された「私物箱」です。箱書きには「JHE 1953 P B No.12」とあります。加藤泰安のご遺族から譲り受けたものですが、どのように使われたのか、由緒書きはないので想像するしかありません。12の番号も含め興味を惹かれるものがあります。

2点目は、1925(大正14)年カナダ・アルバータ峰遠征のスポンサーであった細川護立侯の永青文庫から、1日限りで展示の許可



10mmのベニヤの合板製私物箱

をいただいた「絹製のザイル」です。この遠征では、慶応から隊長の横有恒に橋本静一・早川種三・三田幸夫、学習院から岡部長量・波多野正信の6名が、スイス人のガイド3名とともに初登頂に成功しています。

永青文庫に残る関連文書に、1977(昭和52)年12月に、日本山岳会から当時の永青文庫の理事長・細川護貞宛に「ザイルの返却について」と題した文書が発信されています。どうも、文書の発信された年月までは、日本山岳会に保管されていたようで、長期間借用のお礼の挨拶があり、記として「ザイル(横有恒氏一行のアルバータ登山にて使用したもの)」とあります。

アルバータ峰とのつながりは、1965(昭和40)年に長野高校山岳班が持ち帰った、山頂に残されたピッケルの石突きと、カナダ・ジャスパー博物館にある本体の合体が、35年を経た2000年のカナダ山岳会とJACの年次晩餐会の席上であった、と記録にあります。登山活動の遺物は、多くを物語ると思います。

横有恒の『わたしの山旅』には、

1926(大正15)年に、秩父宮雍仁親王にお供してヨーロッパ・アルプス登山をし、そのときに、ロンドンのアーサー・ビール社に絹製の40m・径12mmのクライミング・ロープを特注した、と記されています。「絹のザイル」が使われたとされるアルバータ峰遠征の翌年が秩父宮様のアルプス登山で、クライミング・ロープがロンドンの商社に発注されています。そのことと、当時、日本の生糸の輸出がピークだったことを考え合わせると、「絹の原産国」と「ザイルの製造国」という推察は、興味深いのではないのでしょうか。

最後になりましたが、講演会後の記念パーティでは、240名を超える多くの皆様方との歓談の機会を得て大変ありがたく、感謝申し上げます。

この稿が出るころの大学山岳部は、100年を経て廃部にならないよう、新入生の勧誘と新人歓迎登山に注力の時期ですが、新型コロナウイルスで見通しが立たない状況にあります。でも、山岳部は昔から秋の入学も多くおられますので、楽観的に構えています。

(学習院山櫻会会長)

FUNDING

苦境に立つ山小屋に支援の輪を

―登山者からも「山小屋エイド基金」などに資金援助

山小屋に書いて記帳も済ませ、ホッとひと息ついた夕暮れ前のひととき……。歩き通した緊張感から解放され、山小屋に着いた安堵感に満たされて、のんびり山小屋で過ごせるひとときほど贅沢な時間はないと思われる。冷えたビールとちよつとしたツマミ、そして、気の合った仲間がいればなおさらである。

しかし、今回のコロナ禍によって、そうした山小屋の憩いのひとときが許されないものとなつてし

まった。4月16日に緊急事態宣言が全国に発令され、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、多くの山小屋が休業を余儀なくされてしまったからである。登山者も山行を控えざるを得なくなり、山から人の賑わいが遠のき、今年は寂しい夏山シーズンを迎えようとしている。

山小屋には3つの大きな役割があると言われている。宿泊場所や食事の提供、登山道の保守・管理やトイレの整備、そして、非常時の避難場所や遭難救助の最前線としての役割である。これらは私たち登山者にとって、安心と安全を保障してくれるかけがえのないものである。仮に今回のコロナ禍によって、富士山や南アルプスのように登山道が閉鎖され、山小屋が休業したままの状態が続くと、山や登山道の荒廃を招くことになり、長期化すればその存続に影響する可能性すら出てくる。山を生活の場としてきた山小屋の経営者や管理人、登山ガイドの人たちにとつ

ては、まさに死活問題であり、切迫した事態なのである。

特に何代にもわたって山小屋を守ってきた人たちは、これまで経験したことのない事態に直面し、その対応に苦慮している。消毒や換気の徹底はもちろんのこと、収容人数の抑制や部屋割り、その配置にも気が配られ、完全予約制を指向している山小屋もある。

今回のコロナ禍の中で3密、すなわち「密閉、密集、密接」を避けるように盛んに言われてきたが、山小屋はその厳しい自然環境や立地、歴史などから考えても、そうした宿命を背負ってきたようなものだ。特に水の確保が難しい稜線の山小屋では、基本的な手洗いやえままならない。概して山小屋は居住スペースが限られ、大部屋という密閉された空間に多くの登山者が集い、寝食をとにもするわけで、すでに感染の下地がでやすいう環境にある、と言えるのである。医療委員会の野口いづみ委員長が、自粛緩和後の登山再開に向けた注意点を具体的に挙げているので(会報「山」901号)、その記事を参照してもらいたい。

いずれにしろ、ウイルス対策が

長期的な取り組みになることが予想され、山小屋が厳しい現実に向き合っていることに変わりはない。ただここへ来て、外出自粛で山行を控えていた登山者の間からも、山小屋の役割を再認識し、支援していかうとする動きが広まってきた。登山者からの支援が、目に見える形で結集するクラウド・ファンディングの提起と募金である。

山と溪谷社の「山小屋エイド基金」と地図アプリで知られるYAMAPの「#山小屋支援プロジェクト」は、春のほば同時期からスタートして、全国の登山者に支援を呼び掛けたところ、それぞれ6000万円以上の募金が寄せられたという。100以上の山小屋の維持経費にあてられるはずだ。YAMAPの支援は6月30日で終了したが、「山小屋エイド基金」は8月13日23時59分まで開設されている。山小屋存続のためにも、私たち登山者ができる範囲で、少しでも手を差し伸べられたらと思う。

なお、「山小屋エイド基金」への連絡は左記へ。

<https://motion-gallery.net/projects/yamagoya-aid>

(神長幹雄)



クラウド・ファンディング・サイトのトップページ

東西南北

N

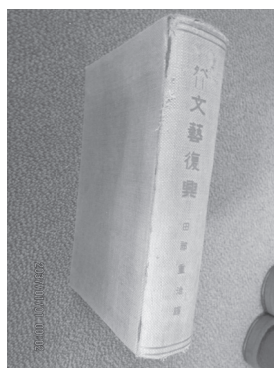
S

田部重治の翻訳書

北村武彦

田部重治は、『日本アルプスと秩父巡礼』を初上梓したあと、そのほかの著作とともに再編・増補されて『山と溪谷』と題し、発行されている。『山と溪谷』ばかりでなく、田部の山岳関係の紀行・随筆などの著作は枚挙に遑^{いとま}がない。けれども田部の本業は英文学である。

もとより私は、登山家(田部流にえば山旅愛好家)を尊敬し、その著作が好きであるが、英文学者



大正4年に発刊された『文藝復興』

としての田部のことは算聞にしてよくは知らない。そこで田部が英文学を志すことになった経緯を、岩波文庫『新編山と溪谷』の巻末、近藤信行氏の解説を借用させていただく。

——東大英文科に在籍していた田部重治は上田敏の教えを受けて英国詩人に親しんでいる。卒業論文にキーツの詩を選んだ。……上田敏からはウォルター・ペイターをすすめられ、その唯美的な思想と統一的性格に共感をおぼえている。そして自然詩人ワーズワースの観照的詩境へ深く入って行った。彼の初期の訳業にペイターの『文藝復興』『全一生活』があるが、それは彼の生き方と無縁ではない——ウォルター・ペイター著『文藝復興』大正4年5月28日発行 A5判285頁、大正8年11月20日訂正第4版発行 292頁 発行所・北星書店 定価3円50銭。同

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

書・岩波文庫 昭和12年10月5日発行 286頁 定価40銭

ペイターは、イギリス・ヴィクトリア朝時代の文人「評論家・批評家・随筆家・小説家」で、唯美主義の立場に立って書いたルネサンスの研究により、19世紀末のデカダンス的文芸思潮の先駆けになった。

ペイターの名が世に広く知られることとなった著作が『ルネサンス』(日本語訳『文藝復興』)である。この著作はルネサンス期の芸術家を論じて、作者自身の芸術観を明らかにした論文である。取り上げた書物・芸術家は、項目順に次のとおりである。

- 1 2つの古いフランスの物語(註・「アミスとアミールの友情」「13世紀の物語と「オーカッサンとニコレット」13世紀後半の物語」。
- 2 ピコ・デラ・ミランドラ(註・イタリア・ルネサンス期の哲学者・人文学者。「人間の尊厳」を主張したとされる。)
- 3 サンドロ・ボッティチエリ(註・イタリア・ルネサンス期のフィレンツェ生まれの画家)
- 4 ルカ・デラ・ロツ・ビア(註・フィレンツェ出身の彫刻家)
- 5 ミケランジェロの詩(註・イタ

リア・ルネサンス期の代表的彫刻家・画家。ダヴィデの大理石像は最高傑作。)

6 レオナルド・ダヴィンチ(註・イタリア・ルネサンス期の画家・建築家・彫刻家。「モナ・リザ」「最後の晩餐」はあまりに有名。)

7 ジョルジョーネ派(註・最盛期ルネサンスのヴェネツィア絵画に大きな影響を及ぼした画家。その影響を受けたのは、セバステアノーなど多数。)

8 ジョアシャン・デュ・ベレー(註・16世紀フランスの詩人。ビエール・ド・ロンサルとともにブレイヤード派の礎を形成した。)

9 ヴィンケルマン(註・18世紀ドイツ美術史家。新古典主義の理論的支柱となり、ゲーテ、レッシングにも影響を与えた。)

この『ルネサンス』の世の中に与えた刺激は多大であり、日本でも日本ペイター協会が結成されるなど、作家では上田敏・小林秀雄・堀辰夫・中村真一郎・三島由紀夫などに影響を与えている。

田部重治がペイター作品の研究を志したのは、明治43年、26歳のときであり、大正3年の夏には上高地に滞在して、『ルネサンス』の

『山岳』2020年 Vol.115 発刊のご案内

今回のコロナ禍のため、編集作業が大幅に遅れてしまいましたが、ようやく『山岳』第115年(2020年)の内容が整ってきました。8月下旬の発行に向けて進行中ですが、主な目次タイトルだけを以下にご紹介します。

【特集「エベレスト登頂50周年」】 1・1970年の日本山岳会隊とスキー隊(江本嘉伸) 2・座談会: 隊員が経験したエベレスト(神崎忠男、鹿野勝彦、嵯峨野宏) 3・登頂手記: 登山許可の取得と登頂への想い(平林克敏) 4・50年のエベレスト、その現代的意味(池田常道)

【第1章 記録】 3回目の挑戦で達成できた、剣岳・北方稜線縦走記(佐藤勇介) / 中央分水嶺縦走 津軽半島・竜飛岬から上越国境・三国峠まで(大島康弘) / 西ネパールに魅了されて(稲葉香)

【第2章 調査・研究】 上高地、岳沢の氷河地形(小嶋尚) / 奥飛騨の山案内人たち(木下喜代男) / ウェストンの九州登山の足跡を探る(田上敏行) / 最近のパミール登山事情と「パミール高原」(田村俊介)

【第3章 紀行】 コーカサス、半世紀ぶりの再訪記(吉川正幸) / ダルコット峠、52年ぶりのカラコルム、ヒンズー・クシュ(高橋善護)

【図書紹介】 『考える脚』荻田泰永著(舟津圭三) / 『空撮ヒマラヤ越え 山座同定』中村保著(井上達男) / 『那須雪崩事故の真相』阿部幹雄著(近藤雅幸) / 『河口慧海——雲と水との旅をするなり』高山龍三著(根深誠) / 『十次事故から読み解く山岳遭難の傷痕』羽根田治著(飯田年穂) / 『東ヒマラヤ』安藤和雄著(山本良三) / 『類例のない伊藤孝一の登山』五十嶋一晃著(荒井正人) / 『The Andes』エベリオ・エチェベリア著(南井英弘)

【追悼】 高村泰雄(齋藤惇生) / 宮森常雄(雁部貞夫) / 日下田實(吉永英明) / 宮原巍(根深誠) / 白旗史朗(節田重節) / 磯野剛太(重廣恒夫)

以下、会務報告、支部の活動報告、委員会の活動報告、山岳図書目録などは例年どおりの構成です。
(『山岳』編集委員会)

翻訳に没頭した。かくして大正4年5月、『文藝復興』が出版されたのである。

深田久弥と荒沢岳

前田英昭

新潟県の荒沢岳は『日本二百名山』には入っているが、三百名山には入っていないという格別な山である。その荒沢岳に昨年10月、登山ツアーで登った。そのときのガイドが意外なことを言う。「深田久弥も登れなかったきつい山です。さあ、皆さんがんばって登りましょう」。えっ、深田久弥も登れなかった? 日本百名山の発案者であり、日本山岳会の副会長を務めた偉大な登山家が登れなかったというのか。

そんな疑問から、改めて手持ちの深田久弥の本20冊ほどを調べてみた。確かに荒沢岳に登ったという記述が見当たらない。荒沢岳は越後三山のすぐ近くの山である。深田は『日本百名山』の魚沼駒ヶ岳の項で、その三山の駒ヶ岳から八海山へ縦走する途中、無風快晴の

中ノ岳の頂上から展望して「越後じゅうの山々が悉く見えた」と書いている。当然、指呼の間に荒沢岳も眼中にあったはずだ。全国幾百千の山に登った深田が、その荒沢岳に登っていないのだからうか。

『山秀水清』(朋文堂の「銀山平」)の項には「中荒沢の川原から荒沢岳がよく見えた。荒々しいが颯爽とした感じの山だ」と書き、登頂意欲を掻き立たせたはずである。『深田久弥・山の文学全集』の年譜には昭和44年の項に「荒沢岳(夏)」と記載があり、登ったことになっている。ただ、なぜか登頂月日と同行者の記載がないのが気になる。念のため石川県加賀市の「深田久弥・山の文化館」に問合せたところ、「著述はありませんが、登っています」との返事だった。その証拠に『忘れえぬ山の人びと』(茗溪堂)の中で、著者の望月達夫に宛てた昭和44年7月20日付の深田の葉書を紹介している。それには「多年の宿望、荒沢岳へ登ったが、ヒロコンパイ。手に持つペンさえ重い」の記述がある。この文章を素直に読めば、やはり登っているのではないか。

では、なぜガイドは「深田久弥は登れなかった」と言ったのだろうか。

深田がそのとき投宿した銀山平の伝之助小屋に確認してみた。ご主人の話によると、確かに深田は仲間とともに荒沢岳に挑戦した。しかし、昭和44年当時は途中の前まえ岳だけという岩峰の部分に登路がななく通過は困難、危険が大き過ぎるため断念した、とのこと。

ご主人の話には説得力がある。現在のように鎖やハシゴが掛けられていても、転落事故が絶えない難路である。まして整備されていなかった当時は、どれほど困難であつたか。さすがの深田も「手に持つペンさえ重い」ほど疲労困憊し、無念にも退却したのだ。

では、あの葉書はなんだろう。「登った」と「登頂した」は同義語ではない。途中までは登ったが、登頂はできなかったというのが真相ではなからうか。

それにしても、1回で登頂できなかったのなら2回、3回と挑戦しなかったのだろうか。現に同じ新潟県の雨飾山や未丈ヶ岳には、3回目の挑戦で登頂しているではないか。

深田久弥が生涯に残した膨大な紀行文のどこかには、荒沢岳のことを書いた文章があるに違いない。



図書紹介

ペーター・ヴォールレーベン著
長谷川圭訳

樹木たちの知られざる生活
活・森林管理官が聴いた森の声



2017年5月
早川書房刊 264頁
四六判 1600円+税

著者は1964年、ドイツのボンに生まれ、子どものころから自然に興味を持ち、大学でも林業を専攻。卒業後、20年以上ライントールプファルツ州営林署で働いたのち、フリーランスで森林の管理を始めた。2015年に出版された本書は全世界で100万部を超

え、登頂した、しないにかかわらず、その文章をぜひ読んでみたいものだ。

えるベストセラーとなるが、日本では2019年に文庫化された。

森林管理の仕事が始めた当初、著者は採算性や利用価値という視点でしか樹木を見ていなかったと吐露する。しかし、20年ほどの時間を観光客相手に企画を立てたり、樹木葬のための森の管理、また、原生林の保護の仕事が加わっていくなかで、彼の狭かった視野が広がった。「樹木は私たちを幸せにしてくれる」と著者は言う。

では、どのように樹木は人を幸せにしてくれるのだろうか？ 彼は各章で「友情」「社会福祉」「木の作法」「力を合わせて」といった人間社会の話のように木を語っている。それは安易な擬人化による樹木との垣根外ではない。木はた

だ動かずに立っているだけの味気ない、黙した存在としてではなく、むしろ社会性を持ち、生きていく上で協力し合ったり、ときには競争に負けまいとがんばったりする存在であることを示していく。

たとえばこんな風に——「社会福祉」という章では、孤立しているブナより、密集しているブナの方が生産性が高いこと、にある専門家が気づいたという、そのデータに即して「1本の木の寿命はそれが立つ森の状態に左右されるから」と説く。つまり「強者だけが生き延びるのは、進化の過程において当然のことだと考える人がいるかもしれないが、樹木の場合はそうではない」と彼は記し、そして、深い言葉が続く——「樹木自身の幸せは、コミュニティの幸せと直接的に結びついている。弱者がいなくなれば、強者の繁栄もあり得ない」と。

この本の魅力は、単に驚くべき様々な樹木の生活が紹介されているだけではなく、私たちの生活や社会と照らし合わせ、なんと樹木たちが幸福な生き方をしているか、その樹木たちの秘密を知ることにある。

彼らの気の遠くなるような長い生涯Ⅱ何百年、何千年Ⅱは忍耐強さ、強靱さ、しなやかさ、知恵なしにはあり得なく、それらに触れることによって私たちの価値観も柔軟に変化する……そうすれば、きつと幸せを感じられるだろう、というのが著者の思いである。「地球の肺」とも言われるアマゾン、数千km離れた場所にも海岸線と同じような降雨をもたらすのは、海岸線から途切れることなく連続する森があるためで、その森の連続性は必須条件。著者はそれを「森のポンプ」と呼ぶ。

また「植物は命のないもの、つまり光などの無生物を利用して生きている。ほかの生物には依存していない」と説かれれば、あらゆるものに「依存しなければ生きていけない私たち人間は、その孤高とした生き様に羨望する。

そして「樹林の世界では年齢と弱さは比例しない。——若い木よりも老木のほうがはるかに生産的である」ということは、私たち人間が気候の変動に対抗するとき、本当に頼りになるのは年をとった木だということを示している」とあれば、人間界の価値観との違いに

唸る。

このように、はつとさせられるような示唆に富んだ珠玉の言葉が散りばめられている本書は、特に現在の温暖化による気候変動で生活の基盤から脅かされ始めている人類にとっては、まさに至言の一冊と言えるのではないだろうか。

(中村好至恵)

山の神々

坂本大三郎著



2019年7月
(株)エイアンドエフ刊
四六判 235頁
1700円+税

著者は千葉県で生まれ育ち、絵が好きだったことからその道の仕事に就き、イラストレーター、芸術家としてアート・イベントなどに参加してきている方である。その過程で、日本の芸術や芸能がどのようにして生まれ発展してきたかを、長い間知りたいたと思っていたと言う。30歳のときに、羽黒山での山伏の修業はだれでも参加できると知り、好奇心から参加したところ、そこで山伏文化に目覚め、今

はより深く学びたいと山形県で暮らすまでになった、という経歴の持ち主である。筆者の知人に羽黒山の秋の峰入りに参加し、山伏名を得た方がいることもあり、興味を持って読んだ。

本書のタイトルは「山の神々」、サブタイトルに「伝承と神話の道をたどる」とあり(英語でもMountain Pantheons, Tracing down its folklore & myth. とある)、著者がこれまで訪ねてきた日本全国の山々の歴史や神話、また、そのときの見聞やエピソードなどを紹介したものである。民俗学的な側面からたどったと言つてよいだろう。したがって、山の神と言うと山岳信仰や修験道を思い起こすが、本書で取り上げられるのは、そうした山ばかりではない。北は北海道から南は沖縄まで、62の山やエリアが登場するが、富士山や立山といった霊山のみならず、えつ!と思うような山も含まれる。それらが以下の7章にまとめられている。「山岳信仰の始まり」「民俗(フオークロア)と山」「山岳信仰以外の山」「金属と猫と狼」「海の家」「北の山岳信仰」「柱と綱とモリ」中でも第二章の「民俗と山」に最も



2020年5月
山と溪谷社刊
四六判 328頁
2000円+税

白嶺の金剛夜叉

井ノ部康之著

多くのページが割かれている。
ここでは戸隠山をはじめ、いかにも信仰の対象といった山もあるが、著者の故郷、千葉県の「鹿野山」（ヤマトタケルにまつわる伝説）や「富山」（南総里見八犬伝）なども取り上げられ、その地にまつわる伝説や神話を紹介している。全国各地の様々な祭りや風習などの話は興味深い。同章の「なめとこ山」はもちろん宮沢賢治の物語であり、これを神話としてとらえたということであろう。「海の山」とは島の山であり、独特の風習が多いように感じる。

多くの山、エリアを紹介している。その中で、山岳の歴史や伝説を知っておくことで、山登りがいっそう豊かなものになるのではないだろうか。

（荒井正人）

本書は昨年11月30日に逝去された、日本の山岳写真界の第一人者、白簾史朗さんの評伝である。作家・井ノ部康之さんが2003（平成15）年1月号から12月号まで1年間、『山と溪谷』誌上で連載した「スーパードラゴン・イン・タビユー 白簾史朗語りつくす」をベースとして本年5月、発刊されたもの。

書名の「金剛夜叉」は金剛夜叉明王のことで、三面六臂、中心面には5つの眼を持ち、6本の手にそれぞれ6つの武器を持つ姿が、山岳写真家並びに登山家として写真集や技術書などを数多く出版し、多くの個展や合同展を開き、各地に写真館が開設されるなど白簾さんの活躍ぶりが、そのイメージに重なることから付けられたと言う。

第1章「富士うつくしき故郷」から始まって、第14章「世界に認められた実績」まで、ほぼ時系列に沿って、停滞することを嫌い成長し続けた、エネルギーに富んだ白簾さんの生涯を俯瞰している。

白簾さんは1933（昭和8）年、岩殿山のすぐ近く山梨県北都留郡廣里村（現・大月市）で生まれた。ある日、1枚の写真を目にしたことから写真に興味を持ち、カメラ

マンを志す。「富士山の写真家」として知られる岡田紅陽に弟子入りのち独立、1962（昭和37）年、自ら山岳写真家として生きていくことを宣言する。

それ以降の活躍ぶりは、ここで記すまでもなからう。『南アルプス』『尾瀬』『富士山』などの写真集をはじめ、『ヨーロッパアルプス』や『NEPAL HIMALAYA』などの豪華写真集は複数の海外版も出版され、各国で高く評価された。

また、登山家としても高みを目指し続け、ヒンズー・クシュに始まってネパール、アルプス、中央ア

ジア、アンデスなど、世界各地の山々に足跡を残している。なかでも1970（昭和45）年、日本山岳会東海支部マカール登山隊に参加したのがハイライトだろうか。

これほど三面六臂の活躍ができたパワーの源は、那辺（なへん）にあつたのだろうか。父母への愛と尊敬、様々なコンプレックスへの反発や世の不条理に対する反骨心など、それらすべてをエネルギーに置き換えて駆け抜けた白簾さんの86年の生涯が、丁寧に綴られている。

内容は少々重たいが、読み応えのある一書である。（節田重範）



令和2年度第3回（6月度）理事会

議事録

日時 令和2年6月10日（水） 19時

00分～21時00分

場所 集会室およびオンライン

【出席者】 古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・

古川各常務理事、安井・清

水・清登・飯田・柏・近藤・

各理事、黒川・石川監事

【欠席】 神尾理事

【オブザーバー】 節田会報編集人

【協議事項】

1・年次総会について協議があった。(古野・永田)
 2・支部合同会議、新入会員オリエンテーション、年次晩餐会など今後の予定について協議があった。(永田)

【報告事項】

1・7人の正会員と1人の準会員の入会を承認した旨、報告があった。(古野)

2・2件の寄附金および助成金受入報告について報告があった。(古川)

3・総会資料の修正について報告があった。(古川・永田)

4・海外登山助成審査委員会について、名称を海外登山助成委員会とし、従来の助成募集と審査に加え、正会員と準会員による遠征について助成や支援を行なう旨の報告があった。(坂井)

5・支部特別事業補助金について報告があった。(坂井)

6・全国古道調査についてプロジェクト・リーダーとプロジェクト・チームを作り進行する旨、報告があった。(飯田)

7・「山小屋エイド」の名義後援依頼に対し承諾した旨、報告があつた。(永田)

8・広島支部の事故調査報告書を受け取り、その内容について報告があった。(古野)

9・東海支部の遭難事故について報告があった。(永田)

10・4団体発信のコロナウィルスへの対応について報告があった。(古野・永田)

11・寄附、公益法人運営委員会、改革事業推進委員会の報告と広報委員会の設置について報告があった。(古野)

12・会報「山」について報告があった。(節田)

ル ム 目 誌 6月

1日 総務委員会

2日 常務理事会 スケッチクラブ

4日 総務委員会

8日 総務委員会 スキークラブ

10日 理事会

11日 「山の日」事業委員会 スケッチクラブ

12日 総務委員会

15日 総務委員会

18日 スキークラブ

19日 会報編集委員会 山岳編集

委員会 山の自然学研究
 22日 資料映像委員会 支部事業委員会

23日 00会 平日クラブ

24日 家族登山普及委員会

25日 公益法人運営委員会 01会

緑爽会

29日 記念事業委員会 二火会

30日 休山会

6月来室者 165名

会員異動

物故

吉田英吉(4597) 20・6・不明

千葉重美(5383) 不明

大野正子(5480) 20・2・3

豊田 博(9938) 19・11・不明

小泉誠一(12335) 20・5・11

杉浦哲和(13721) 19・不明

海老名保(14210) 20・6・3

退会

近藤育代 (6381) 信濃

大木淑子 (8269)

大坂敏子 (9478)

鶴田佐知子 (9649) 熊本

山縣喜美子 (11087) 福井

高須梧郎 (11397) 静岡

阿世知義幸 (12035)

豊田和司 (12700) 広島

山本和彦 (12713) 広島

八重康夫 (13161) 東九州

高橋宜也 (13817) 北海道

恒吉克範 (13831) 宮崎

恒吉詔子 (13832) 宮崎

野崎雅之 (15434) 東海

本谷智津子 (15523) 広島

小口弘美 (15745) 東海

清水葉月 (16502) 東海

荻野和馬 (16508)

木下好恵 (A0239) 福井

木下和也 (A0240) 福井

栗原卯子 (A0245)

I N F
O R M

インフォメーション

A I
O N

◆熊野古道・中辺路山行のご案内

山行委員会

紀伊・田辺市滝尻王子から熊野本宮を経て那智本宮大社まで熊野古道・中辺路を歩きます。紀伊・田辺に前泊し、途中の継桜王子、熊野本宮、小口に宿泊。1日おむね7～9時間歩きます。標高300mから900m程度。雨天決行日程 9月22日(火)～26日(土) 4泊5日

集合 22日 JR紀伊田辺駅 6時15分

解散 26日15時 那智本宮大社。バスにてJR熊野駅に連絡

行程 21日〓前泊。紀伊田辺のビジネスホテル2軒に分宿

◆常念岳―東天井岳―大天井岳―西岳―上高地

25日〓小口―大雲取越―那智本宮大社。14・5km。歩呈7時間30分。
費用 4万円(4宿泊費、弁当代、傷害保険料、雑費)
定員 先着8名。
申込み 8月31日までに住所、氏名、会員番号、生年月日、電話番号、緊急連絡先を明記の上、^{そやみ}征矢三樹宛。申込み者に詳細案内を送付。

✉ sanko@jac.or.jp

FAX 03-6886-4392

TEL 080-3558-3250

紅葉の北アルプスを常念岳から大天井岳、西岳を経由して上高まで眺望を楽しみながらの縦走です。

日程 9月11日(金)～13日(日)

集合 11日(金) 松本駅 6時50分

行程 11日〓松本駅―一ノ沢登山口―常念小屋―常念岳―

常念小屋(泊) 12日〓常念小屋―大天井岳―ヒュッ

テ西岳―西岳―ヒュッテ西岳(泊) 13日〓ヒュッテ西

岳―水俣乗越―槍沢ロッジ

岳―水俣乗越―槍沢ロッジ

―横尾山荘―小梨平森のリゾート(入浴)―上高地バスターミナル(解散)

歩程 11日〓約6時間50分 12日〓約8時間10分 13日〓約7時間50分(健脚向き)

費用 2万7000円(山小屋代2泊・タクシー代・保険料)

定員 先着8名まで

申込み 8月17日(月)までに、三枝光吉宛

TEL 080-6627-5687

✉ sanko@jac.or.jp

傷害保険加入のため、性別・生年月日をお知らせ下さい。また、参加者名簿作成のため、会員番号・住所・緊急連絡先(続柄)・電話番号・携帯電話番号などお知らせ下さい。

訂正

「会報」2019年5月号(888号)会員異動・退会欄、川端源一郎様の会員番号は11042、島津常樹様は14436、水口忍様は14877の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

◆編集後記◆

●私の新人の冬山合宿は剣岳西面でした。1960年代は豪雪が当たり前で、4日間降つては1日晴れ、また4日間降り積もるという毎日でした。そんな雪まみれの厳しい状況の中ひたすら耐え忍び、わずかなチャンスをつかんで先輩たちが、早月・小窓両尾根から剣岳の同時登頂に成功しました。

●ヒマラヤのマカールに初登頂、しかも全員登頂という快挙を成し遂げたときの隊長、ジャン・フランコは「山は根気強い勤勉さと、沈着と、頑張りの学校だ」と記しています。コロナ禍で活動自粛が続く今、「山」に学ぶことはたくさんありますが、山こそ「忍耐を学ぶ学校だ」と、フランコさんに付け加えていただきたかったと思っています。こころです。

(節田重節)

日本山岳会会報 山 902号

2020年(令和2年)7月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社